書　評・紹　介

James W. Wood

Dynamics of Human Reproduction: Biology, Biometry, Demography

Aldine de Gruyter, 1994, 653pp.

出生・生殖分野の人口学研究は，1950年代にデイビス（K. Davis）とブレイク（J. Blake）が出生力媒介変数の概念を確立したことにより，それまで別々に行なわれていた医学・生物学的アプローチと社会経済学的アプローチが接点を見いだし，総合的な視点から出生力決定要因に関する研究が進められることになった．このうち生物人口学的出生力研究に関して，近年の研究業績の集大成ともいえるようなまとまった書物が，1980年代以降3冊登場した．(1)ボンガーツ（J. Bongaarts）とポッター（R. Potter）の共著 *Fertility, Biology, and Behavior*（1983年），(2)グレイ（R. Gray）編 *Biomedical and Demographic Determinants of Reproduction*（1993年），および(3)本書である．(1)は有名なボンガーツ・モデルの成り立ちを説明したものである．(2)は国際人口学会（IUSSP）のワーキンググループにより1988年に米国のボルチモアで開かれた「ヒト生殖の生物医学的および人口学的決定要因に関するセミナー」に寄せられた27の論文を収載したものである．

(1)(2)(3)いずれも「近接要因」（proximate determinants）を扱ったものであるが，(1)が自然出生力と出生コントロール（避妊，人工妊娠中絶）の両方を統合した出生力決定モデルへの収束をめざしているのに対し，(2)(3)は自然出生力（natural fertility：出生コントロールの存在しない状態における出生力）に的を絞ってより精緻な検討を行なっている．いうなればボンガーツなどのデコンポジション法やシミュレーション法が出生力水準決定の全体的な定量的モデル化を志向しているのに対し，(2)(3)はそのパラメーターについて詳しく再検討する作業に貢献しているという見方もできよう．特に本書の特徴は1人の著者によるものであるため系統的・網羅的であり，豊富な資料が用意されており（図は200枚以上），かつペンシルベニア州立大学で人類学の教授をつとめる著者ウッドの専攻分野から，人類学的・生理学的側面に多くのページが当てられていることである．

本書は次の3部12章からなる．

第1部：自然出生力（1．緒言，2．自然出生力の型式，3．自然出生力決定要因の分析の枠組み）

第2部：自然出生力の近接要因（4．卵巣周期と妊娠可能期間，5．受胎・着床・妊娠，6．胎児の喪失，7．受胎確率と性交頻度，8．母乳哺育と産後不妊期間，9．初経と閉経，10．永久不妊の始まり，11．結婚と男性の寄与）

第3部：近接要因を超えて（12．拡張と精緻化）

本書の内容は多岐にわたっており，たとえば近年著しい進展を遂げた生殖医学の成果も取り入れられている．一例を挙げれば，ホルモンの測定により妊娠のごく早期の流産が検知されるようになり，そのような認識されない胎児喪失は従来考えられていたよりはるかに高率に起こっていることが分かったことである．このような知見は自然出生力の分析における従来の受胎と流産の区分に微妙な変更をもたらすのであろうか．しかし本書全体から強く思い知らされることは，性と生殖をめぐるヒトの行動と生理的現象は複雑きわまりなく，いまだこの分野の未知の領域はとてつもなく大きく，したがって近接要因による定量的な出生力決定モデルの構築は容易なことではないということである．

いずれにしても本書は，出生力・生殖の生物人口学研究を志す人にとって，貴重な教科書であり必読書であるといえよう．

（佐藤龍三郎）